

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 3 月 31 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21320007

研究課題名（和文） 「和解」概念の再構築－平和への応用倫理的アプローチ

研究課題名（英文） Reconstruction of Reconciliation: an Approach to Peace from the Viewpoint of Applied Ethics

研究代表者

越智 貢（MITSUGU OCHI）

広島大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：00152512

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、平和実現のための実践的で総合的な理論モデルを提示することである。とりわけ、その特徴は、「平和」の問題を、現実生活の諸相が織りなす「和解」の問題として再構成する点にある。研究期間を通じて、応用倫理学（生命、環境、教育、政治、社会）的アプローチによって上記の課題を追求した。本研究の結果、異質な者に対する排他性、闘争性とその連鎖という根源的な問題に、「和解」のプロセスを示すことができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to show a practical and synthetic model in theory in order to establish a peace. Especially, the distinguishing feature of this research is a point to reconstruct the problem of 'Peace' from a perspective of 'Reconciliation' woven by various phases of actual life. This theme is pursued by multifaceted approaches of applied ethics –bioethics, environmental ethics, educational ethics, political ethics and social ethics- through this research. As a consequence, some processes of 'Reconciliation' to solve the following basic problems are shown: exclusiveness and belligerence against heterogeneous groups, and an ever-deteriorating series of such unfortunate events.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
2010年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
2011年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
総計	12,600,000	3,780,000	16,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：倫理学原論・各論、「和解」概念の再構築

1. 研究開始当初の背景

本研究の直接の着想は、応用倫理学プロジェクト研究センターによる 2008 年度の「平和研究」に端を発する。具体的には、越智・山内による日本哲学会シンポジウム「平和・戦争・暴力」の企画運営や、同年 7 月の例会に招待したフランクフルト大学 M. ルッツ＝バッハマン教授との「国際公法と暴力」をめぐる討論等が本研究開始のきっかけとなる。さらに、ここで繰り広げられた「平和」に関する哲学的な課題を、政治哲学の領域からだ

けではなく、あらゆる応用倫理学領域（生命・環境・教育・政治・社会等）を射程に入れた「和解」の視点から再構成することが、本プロジェクト研究センターの新たな研究課題として設定された。

2. 研究の目的

本研究の目的は、平和実現のための実践的で総合的な理論モデルを提示することにある。具体的には、ひろく実際生活にかかわる「和解」概念に注目した。ねらいは、「平和」（あるい

は戦争)の問題を、より現実的な生活のレベルに引き下げて考えることにある。「和解」とは、〈異質なもの(異質だと感じるもの)〉が対峙する様態を示す〈不和〉の対概念である。そうした「不和」と「和解」の関係は、私たちの生活のあらゆる場面でみられ、家族間、友人間、組織間、国家間、さらには自然や神との間においても成立する。このように本研究は、「平和」を、現実生活の諸相が織りなす「和解」の問題として再考する試みといえる。

3. 研究の方法

研究の手法は、現実場面を見ずえた生命倫理・環境倫理・教育倫理・政治倫理・社会倫理の各領域からの哲学的小および応用倫理的アプローチとなる。「和解」のプロセス(不和→歩み寄り→互いの赦し:互惠・共生・共存)を応用倫理的な手法で分析・総合することを通して、〈異質なものに対する排他性・闘争性とその連鎖〉という根源的な問題の解明と克服をめざした。

具体的には、理論面においては、内外の関連文献を渉猟する一方で、可能なかぎり、各領域における国内外の研究者と交流をはかることによって理論の汎用的な可能性を追求していった。実践面では、研究の素材となる基礎データを集めるため、各領域がもつフィールドで意識調査等をおこなった。それらの問題提起と研究成果は、研究会、シンポジウム、海外の専門家の招待講演、著作・論文の刊行等を通じて毎年公表された。

4. 研究成果

2009年度には、「和解概念の再構築」という統一テーマにて研究会(8月)を開催し、そこでの発表を受け、つぎの論文がセンター研究成果報告書『ぷらくしす』(第11号)上に公刊された。政治領域では、山内廣隆「和解のために—東アジア共同体とヨーロッパ連合」、濱井潤也「マイケル・ウォルツァーの正戦論における道徳性について」(第三回石橋湛山新人賞佳作受賞論文)、社会領域では、ヘーゲルの自己意識に着目する社会理論の可能性を示したクヴァンテとジープによる *Auswege oder Fluchwege? Hegels Philosophie als Herausforderung für die Gegenwart*、松井富美男「「和解」への倫理的スケッチ—異文化理解への道を求めて」、生命領域では、手代木陽「生体臨床医学と人間の尊厳—K. ブラウンの見解の検討」が公刊された。

さらに、翌年2月の研究会を受け、飯島昇蔵「レオ・シュトラウスの思想における「戦争と平和」あるいは「闘争と和解」、太田義器「正戦論の理論的根拠と歴史的展開」(ともに政治領域)が前誌(第12号)に掲載さ

れた。他に、環境領域から、畠中和生「環境倫理学の成立—初期の環境倫理学論争」『広島大学大学院教育学研究科紀要』(54号)や、社会・宗教領域から、Haruko OKANO, *Friedenskonzepte im japanischen Kontext. Reflexionen nach Hiroshima und Nagasaki*. In: Thomas Schreijack (Hrsg.), *Theologie interkulturell*.

Glaubenskommunikation in einer gewandelten Welt. Paderborn 2009.がある。

2010年度には、9月に、越智貢を司会者、加藤尚武をコメンテーターとして、「正戦論(政治領域)」をテーマにシンポジウムを開催した。それに基づく論文(前誌第12号)として、加藤尚武「正戦論の含意—ナショナリズムと帝国主義」、濱井潤也「「正戦伝統」と国際秩序—ジェームズ・ターナー・ジョンソンの「正戦論」分析を通じて」、碓智樹「ウォルツァー正戦論における“隠れた”バックス・アメリカーナ」、眞嶋俊造「正戦論の使い方、使われ方:バラク・オバマのノーベル平和賞受賞演説にみる正戦論演説を例に」、太田義器「正戦論の理論的根拠と歴史的展開」が著された。12月には、フランクフルト大学 T. シュライエック教授の招待講演

“Wahrheitskommissionen als neue Instrumente in Friedens- und Versöhnungsprozessen. Erfahrungen der“Transitional Justice”in Lateinamerika am Beispiel Peru.”(第12号に掲載)を通して、移行期の正義について、「和解」の観点から討議した。本号の他の成果として、教育領域から Yoshinori ETO, *A Theosophical Paradigm in Montessori Educational Thought: A Point of Contact with Steiner Educational Thought*、社会領域から桐原隆弘「ヨーロッパ文化の「再建」と諸文化の「融和」、L. ジープ, *Hegels Holismus und die gegenwertige Sozialphilosophie*.が掲載された。

2011年度には、9月に、政治哲学に通じる杉田孝夫と高田純を招き、「和解」概念の再構築をテーマに研究発表会をおこなった。政治領域から、石崎嘉彦「和解性と合理性—初期ヘーゲルの三位一体論解釈と合理性批判の限界」、杉田孝夫「『和解』は可能か—政治哲学的問い」、高田純「ヘーゲルにおける和解と弁証法」、濱井潤也「マイケル・ウォルツァーの特定主義(Particularism)—普遍的正義と特殊的文化との和解」、社会領域から、野村卓史「ヘーゲル『精神現象学』における「和解」、教育領域から、衛藤吉則「西晋一郎における特殊即普遍のパラダイム—「和解」概念構築の手がかりとして」、環境領域からは、後藤弘志「フッサールにおける自然との和解」が発表され、前誌13号に論文として掲載した。最後に、本年度は「和解

概念の再構築」に向けた科学研究の最終年度であり、全員が各領域から論文を書き、研究成果報告書『「和解」概念の構築—平和への応用倫理的アプローチ』（代表者 越智貢）を刊行した。

最後に、本研究の学術的な特色と独自性を示したい。それらは以下の点に集約される。

1) 蓄積された各応用倫理学の成果を、「和解」概念の構築に向けて総合する（総合応用倫理的視点）、2) 各領域は実践的なフィールドをもち、そこで理論の検証をおこなう（理論と実践の循環的視点）、3) 各領域で海外との研究交流があり、文化を越えた総合的な議論が可能となる（国際的総合的視点）。さらに、本研究から予想される意義について述べておく。今日、世界的な情勢をみるかぎり、単純な功利性に基づく成長神話や固定したひとつの尺度による一方向的な支配が不可能であることが歴史的に確認されつつある。排他性はさらなる排他性を引きおこし、負の連鎖があらゆる領域で生じている。こうした時代状況にあつて、異質なものを（異質と感ぜられるもの）が異質のままに共生できるための新たな原理が希求される。本研究がめざす「和解（赦し）」の理念は、まさにそうした要求に応えることを可能にするものといえる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 26 件）

1. 野村卓史 『「精神現象学」における良心と自覚と和解』『ぶらくしす』（査読有）第 13 号、2012、pp.1-8
2. 濱井潤也 「マイケル・ウォルツァーの特定主義（Particularism）—普遍的正義と特殊的文化との和解？」『ぶらくしす』（査読有）第 13 号、2012、pp.9-21
3. 衛藤吉則 「西晋一郎における特殊即普遍的パラダイム（1）—「和解」概念構築の手がかりとして」『ぶらくしす』（査読有）第 13 号、2012、pp.23-41
4. 後藤弘志 「フッサールにおける自然との和解—動物の地位について」『ぶらくしす』（査読有）第 13 号、2012、pp.43-55
5. 石崎嘉彦 「合理性と和解性—ヘーゲルの三位一体論解釈と合理性批判の限界」『ぶらくしす』（査読有）第 13 号、2012、pp.57-77
6. 岡野治子 「ドイツの神学誌 Pulik Forum の問いに回答する—自然災害と原発問題と日本人」『ぶらくしす』（査読有）第 13 号、2012、pp.115-124
7. 石田三千雄 「自然との和解とは何を意味するのか—自然倫理学の根拠づけの試み」

- （査読有）『ぶらくしす』第 13 号、2012、pp.125-138
8. 手代木陽 「着床前診断と障害者の尊厳—M. クヴァンテの見解の検討」『ぶらくしす』（査読有）第 13 号、2012、pp.139-146
 9. Hiroataka YAMAUCHI, A call for philosophical thinking. In: *The Japan Times*, (査読無し) Wednesday, March 2, 2011
 10. 濱井潤也 「「正戦伝統」と国際秩序—ジェームズ・ターナー・ジョンソンの「正戦論」分析を通じて—」『ぶらくしす』（査読有）第 12 号、2011、pp.47-53
 11. 碓智樹 「ウォルツァー正戦論における“隠れた”ボックス・アメリカナ」『ぶらくしす』（査読有）第 12 号、2011、pp.55-62
 12. 眞嶋俊造 「正戦論の使い方、使われ方：バラク・オバマのノーベル平和賞演説を例に」『ぶらくしす』（査読有）第 12 号、2011、pp. 63-67
 13. Yoshinori ETO, A Theosophical Paradigm in Montessori Educational Thought. A Point of Contact with Steiner Educational Thought. 『ぶらくしす』（査読有）第 12 号、2011、pp.107-122
 14. 石田三千雄 「ラヴァーターにおける顔の記号学—ラヴァーター観相学の背景とその射程—」『シェリング年報』（査読有）第 19 号、2011、p.121-129
 15. 石崎嘉彦 「「理性—啓示」問題と政治哲学」『政治哲学』（査読有）第 10 号、2011、pp.95-120
 16. 山内廣隆 「和解のために—東アジア共同体とヨーロッパ連合」『ぶらくしす』（査読有）第 11 号、2010、pp.1-10
 17. 濱井潤也 「マイケル・ウォルツァーの正戦論における道徳性について—ウォルツァーの政治哲学における「情念」との関係—」（第三回石橋湛山新人賞佳作受賞論文）『ぶらくしす』（査読有）第 12 号、2010、pp.27-39
 18. 手代木陽 「生体臨床医学と人間の尊厳—K. ブラウンの見解の検討」『ぶらくしす』（査読有）第 11 号、2010 年、p.61-67
 19. 松井富美男 「「和解」への倫理的スケッチ—異文化理解への道を求めて—」『ぶらくしす』（査読有）第 11 号、2010、pp.69-73
 20. 山内廣隆 「環境思想の課題と展望—ドイツ環境哲学について」『環境思想・教育研究』（査読有）第 4 号、2010、pp.6-9
 21. Yoshihiko ISHIZAKI, “Reading Leo Strauss as a Postmodern Philosophy” In: *Leo Strauss in the East Asian Context*, Korea University, Seoul, 2010, pp. 67-80 (査読有)
 22. 後藤弘志 「フッサールにおける習性概念の倫理的および方法的意義—シャフツベリ—およびカントとの対決を通して—」日

- 本倫理学会編『倫理学年報』（査読有）第58集、2009、pp.189-202
23. 衛藤吉則「西晋一郎の思想—特殊即普遍のパラダイム」日本教育哲学会編『教育哲学研究』（査読有）第99号、2009、pp.147-152
 24. 石崎嘉彦「テクノロジーと僭主政治—それに立ち向かう論理とは—」『ぶらくしす』（査読有）第10号、2009、pp.57-62
 25. Shunzo MAJIMA, 'Forgotten Victims of Military Humanitarian Intervention: A Case for the Principle for Reparation?', *Philosophia: Philosophical Quarterly of Israel* 37:2, 2009, pp. 203-209 (査読有)
 26. Shunzo MAJIMA, 'What is Wrong in Killing Civilians?', *Journal of the Graduate School of Letters* Vol. 4, pp. 67-76, 2009 (査読有)

[学会発表] (計 11 件)

1. 野村卓史『『精神現象学』における良心の自覚と和解』広島大学応用倫理学プロジェクトセンター例会（第11回）2011.9.25、広島大学。
2. 濱井潤也「マイケル・ウォルツァーの特定主義 (Particularism) —普遍的正義と特殊的文化との和解?—」広島大学応用倫理学プロジェクトセンター例会（第11回）2011.9.25、広島大学。
3. 衛藤吉則「西晋一郎における特殊即普遍のパラダイム—「和解」概念構築の手がかりとして」広島大学応用倫理学プロジェクトセンター例会（第11回）2011.9.25、広島大学。
4. 後藤弘志「フッサールにおける自然との和解—動物の地位について—」広島大学応用倫理学プロジェクトセンター例会（第11回）2011.9.25、広島大学。
5. 石崎嘉彦「合理性と和解性—ヘーゲルの三位一体論解釈と合理性批判の限界—」広島大学応用倫理学プロジェクトセンター例会（第11回）2011.9.25、広島大学。
6. 濱井潤也「「正戦伝統」と国際秩序—ジェームズ・ターナー・ジョンソンの「正戦論」分析を通じて—」広島大学応用倫理学プロジェクトセンター例会（第9回）2010.9.26、広島大学。
7. 裕智樹「ウォルツァー正戦論における“隠れた”パックス・アメリカーナ」広島大学応用倫理学プロジェクトセンター例会（第9回）2010.9.26、広島大学。
8. 眞嶋俊造「正戦論の使い方、使われ方：バラク・オバマのノーベル平和賞受賞演説を例に」広島大学応用倫理学プロジェクトセンター例会（第9回）2010.9.26、広島大学。
9. 山内廣隆「和解のために—東アジア共同体

- とヨーロッパ連合」広島大学応用倫理学プロジェクトセンター例会（第7回）2009.8.6、広島大学東千田キャンパス。
10. 濱井潤也「マイケルウォルツァーの正戦論における道徳性について—ウォルツァーの政哲学における「情念」との関係—」広島大学応用倫理学プロジェクトセンター例会（第7回）2009.8.6、広島大学東千田キャンパス。
 11. 手代木陽「生体臨床医学と人間の尊厳—K.ブラウンの見解の検討」広島大学応用倫理学プロジェクトセンター例会（第7回）2009.8.6、広島大学東千田キャンパス。

[図書] (計 7 件)

1. 後藤弘志『フッサール現象学の倫理的解釈：習性概念を中心に』ナカニシヤ出版、2011、総頁数 292 頁 (単著)
2. 石崎嘉彦『ポストモダンの人間論—歴史終焉時代の知的パラダイムのために—』ナカニシヤ出版、2010、総頁数 268 頁 (単著)
3. 眞嶋俊造『民間人保護の倫理』北大出版会、2010、総頁数 22 頁 (単著)
4. Haruko OKANO, Friedenskonzepte im japanischen Kontext. Reflexionen nach Hiroshima und Nagasaki. in: Thomas Schreijäck (Hrsg.), *Theologie interkulturell. Glaubenskommunikation in einer gewandelten Welt*. Paderborn 2009. s.231-s.243.
5. Haruko Okano, Beispiel Japans. in: Juergen Court, Michael Kloecker (Hrsg.), *Wege und Welten der Religionen*, Lembeck/Franfurt a.M. 2009. s.429-s.438
6. 石崎嘉彦『倫理学としての政治哲学—ひとつのレオ・シュトラウス政治哲学論—』ナカニシヤ出版、2009、総頁数 412 頁 (単著)
7. Haruko OKANO, Friedenskonzepte im japanischen Kontext. Reflexionen nach Hiroshima und Nagasaki. In: Thomas Schreijäck (Hrsg.), *Theologie interkulturell. Glaubenskommunikation in einer gewandelten Welt*. Paderborn 2009. s.222-s.242

[その他]

ホームページ等
 広島大学応用倫理学プロジェクト研究センター
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/aepc2005/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

越智 貢 (OCHI MITSUGU)
広島大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：00152512

(2) 研究分担者

岡野 治子 (OKANO HARUKO)
清泉女子大学・キリスト教文化研究所・
研究員
研究者番号：50204003

山内 廣隆 (YAMAUCHI HIROTAKA)
広島大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：20239841

松井 富美男 (MATSUI FUMIO)
広島大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：60209484

後藤 弘志 (GOTO HIROSHI)
広島大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：90351931

衛藤 吉則 (ETO YOSHINORI)
広島大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：60270013

畠中 和生 (HATAKENAKA KAZUO)
広島大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：60243523

濱井 潤也 (HAMAI JYUNYA)
広島大学・大学院文学研究科・特任助教
研究者番号：10612369
(H23)

野村 卓史 (NOMURA TAKUSI)
広島大学・大学院文学研究科・特任助教
研究者番号：40612362
(H23)

石崎 嘉彦 (ISHIZAKI YOSHIHIKO)
摂南大学・外国語学部・教授
研究者番号：80232289

石田 三千雄 (ISHIDA MICHIO)
徳島大学・大学院ソシオ・アーツ・
アンド・サイエンス研究部・教授
研究者番号：90127605

裕 智樹 (HAZAMA TOMOKI)
福山平成大学・福祉健康学部・講師

研究者番号：30615480
(H23)

手代木 陽 (TESHIROGI YO)
神戸市立高専・一般科・教授
研究者番号：80212059

眞嶋 俊造 (MAJIMA SYUNZOU)
北海道大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：50447059

(3) 連携研究者 無し
()

研究者番号：